様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 ２８ 日現在

機関番号：３２６８９
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2018
課題番号：１５Ｋ０１９６９

研究課題名（和文）鉱山遺構の遺産化と観光化をめぐる比較研究

研究課題名（英文）Comparative Research on Mining Remains as the Industrial Heritages and the Tourist Attractions

研究代表者
周藤　真也（SUTO, Shinya）

早稲田大学・社会科学総合学術院・教授

研究者番号：６０３２３２４２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、産業遺産の中でもとりわけ鉱山にかかわる遺構や遺物が価値づけられ、観光対象となる可能性について検討することを目的として国際比較研究を行った。国内の事例としては、栃木県の旧足尾銅山地域において、主として写真資料の可能性を検討した。海外においては金属鉱山を中心に、鉱山博物館や遺構の観光対象化の事例について、精力的に現地視察を行った。これらの活動を通して、必ずしも十分には知られていなかった世界各地の事例について資料・情報を収集することができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
日本社会では、世界遺産に対する関心が比較的高いにも関わらず、産業遺産に対しては観光対象としての可能性について、十分な検討がされてはこなかった。本研究では、そうした学術的研究が不十分な領域を補うとともに、遺産化と観光化の先進地であるヨーロッパから、近代における鉱山技術の世界的な広がりを意識し、北米や東南アジア、ラテンアメリカなどの各地の鉱山遺構について、遺産化と観光化の多くの事例を視察し情報・資料の収集を行った。その知見は今後の産業遺産に関する活動に大いに活かせられると思われる。

研究成果の概要（英文）：In this international comparative research, the possibilities that industrial heritages, especially mining remains, would become tourist attractions were studied. In the domestic case, at the Ashio old copper mine area in Tochigi Prefecture, the possibilities that old photographic materials would become industrial heritage and tourist attraction were examined. In abroad, especially on the old mineral mines, many cases of mine museums and tourist attractions that use mining remains were made inspections. Through these studies, many documents and informations for such the world's unknown cases could been collected.

研究分野：社会学（知識社会学・観光社会学）

キーワード：産業遺産　鉱山　遺産化　観光資源　観光のまなざし　博物館　世界遺産

１．研究開始当初の背景

わが国の産業遺産に対する国家的な取り組みは欧米に比べて遅れ、1990 年代になってから、文化庁が「近代化遺産」として対象となる文化財を調査・選定するに至った。また、経済産業省も、2000 年代後半に「近代化産業遺産」を選定して「先人達の物語」とともに提示しているが、そこではそれらが「地域活性化のため」の「地域観光資源」であることが謳われていた。一方、UNESCO の世界遺産条約を 1992 年に批准したわが国では、それ以後、世界遺産に対する関心が急速に高まった。その理由の一つとして、従来の日本社会において評価が固定化していた観光地の位階秩序に対して、別様の評価の尺度を与えたことがあげられよう。「白神山地」（自然遺産、1993 年）、「白川郷・五箇山の合掌造り集落」（文化遺産、1995 年）、「紀伊山地の霊場と参詣道」（文化遺産、2004 年）、「石見銀山遺跡とその文化的景観」（文化遺産、2007 年）などでは、世界遺産登録をきっかけとして多くの人々が訪れるようになった。これらの地域は、必ずしも有名ではなかったり、地理的な条件から訪れにくかったりしていたが、世界遺産への登録は、多くの人々からの関心を集め、訪れるきっかけを与えたのである。

こうした国内の世界遺産への関心の高まりは、各地での世界遺産への登録を推進する運動となって現れた。文化庁は 2007，08 年度に全国の地方公共団体に対して、日本の世界遺産暫定一覧表に追加記載することが適当と考えられる文化資産についての公募を行い、2007 年度には 24 件、2008 年度には 13 件の新規提案を集めた。その中から、2007 年度には４件、2008 年度には５件の文化資産が暫定一覧表に記載されたが、他の 27 件については、「主題・資産構成・保存管理等を十全なものとしていくためには、なお相当な作業が見込まれるため」、あるいは「顕著な普遍的価値を証明することが難しいため、主題の再整理や構成資産の組み換え、更なる比較研究等が必要と考えられる資産」として、暫定一覧表記載には至らないと判断されている。このとき、暫定一覧表に記載されたもののうち、産業遺産に該当するものは、「富岡製糸場と絹産業遺産群」、「九州・山口の近代化産業遺産群」、「金を中心とする佐渡鉱山の遺産群」の３つである。2014 年に世界遺産に登録された「富岡製糸場～」は、2007 年の「石見銀山遺跡～」に次いでわが国で UNESCO の世界遺産に登録された二つ目の産業遺産であり、さらに 2015 年には「九州・山口の近代化産業遺産群」改め「明治日本の産業革命遺産～製鉄・製鋼、造船、石炭産業」が世界遺産に登録された。このように、産業遺産は、地域アイデンティティの再構成や観光開発の「切り札」の一つとして近年注目されるようになってきており、特定の産業遺産を UNESCO の世界遺産に登録する運動は、その延長に位置づけられる。産業遺産は、地域住民の共通の記憶として地域づくりの核に据えられる一方、産業遺産を対象としたツアーが組まれるなど、観光化の取り組みも見られる。しかしながら、今回、日本政府によって推薦された「明治日本の産業革命遺産～」に見られるように、産業遺産はいささか地味な観が否めない。これにはもちろん、これまで数多くの文化遺産が世界遺産に登録されてきており、繰り返される祝賀ムードに食傷気味になっていること、個々の構成資産が比較的地味であること、九州各県や山口県内だけでなく、他の地域の関係資産も加えたことによって散漫な印象を与えていることなど、いくつかの理由が考えられる。このように全国的な盛り上がりをいささか欠いていることは、産業遺産のもつ性質が現れているとともに、日本における世界遺産登録運動が転換点を迎えていることを示すものであるかもしれない。

研究代表者は、2008 年度から鉱山や開拓の歴史を中心とした産業遺産をめぐる記憶についての社会学的な研究に取り組んできており、本研究計画の基盤を成す研究を行ってきた。そこでは、日本各地の鉱山を中心とした旧産業の遺構や関係する歴史資料館の視察、地域での旧産業の歴史を活かした取り組みについての情報・資料の収集を行い、特に栃木県日光市足尾町の旧足尾銅山地域をフィールドとして、地域における活動について関係者へのインタビューや参与観察を行ってきた。また、ヨーロッパの一部や東アジア地域における同種の事例について現地調査と資料・情報収集を行ってきた。本研究は、これらを踏まえて、本格的な国際比較研究を実施するものである。

２．研究の目的

旧産業の遺構や遺物に対して、まなざしが向けられるとき、たとえば産業遺産として価値づけられ、地域づくりや観光開発の資源として活用されるとき、それらをめぐる歴史や記憶はどのように再構成されるのか。本研究は、産業遺産の中でも、とりわけ鉱山の遺構が価値づけられ、観光のまなざしを受ける際の特徴を明らかにし、鉱山の遺構を巡る旅行者の経験を明らかにすることを目的とする。本研究では、このような関心の下、社会学や文化人類学などにおける先行研究を参照しながら、申請者のこれまでの研究の蓄積と、日本における同種の事例をベースに置きつつ、諸外国の事例を参照することを通して、比較研究を行うことを目的とする。

３．研究の方法

M.アルバックスの「集合的記憶」の概念を挙げるまでもなく、産業遺産はその地域の歴史と関係した社会的記憶となっており、地域性の象徴として、観光産業にも活用されている。こうした産業遺産とツーリズムのあり方は、E.ホブズボウムらの「伝統の創造」や J.アーリの「観光のまなざし」でも議論されたように、現在において遺構や遺物を価値あるものとして位置づけ遺産化する実践であるともに、「過去についての事実」を再構成する実践である。しかしながら、殊、産業遺産においては、こうした歴史の再構成は必ずしもうまくいっていないことがあるように

思われる。たとえば、海外の世界遺産を中心についてめぐるツアーは、数多くあるが、その中に産業遺産を含むものは稀であり、さらに産業遺産を中心に巡るものは皆無に等しい。国内においても、産業遺産を主題としたツアーは、単発では組まれるものの、継続して実施することが難しい。これらのことからわかるように、産業遺産は、マス・ツーリズムになじまない性質があると考えられる。産業遺産は、訪れたツーリストに対し、その地域の歴史を丹念に勉強させるものであり、そうした「真面目」な探究を経てはじめて面白いものとなる。こうした産業遺産の側面は、見た目が派手で享楽的なものに惹かれ易い大衆的な娯楽としての性質をもったマス・ツーリズムとはそりが合わないことは、当然であるかもしれない。さらに、次のような問題もある。日本はかつての世界有数の鉱山国であり、明治期において銅は生糸と並んで主要な輸出品目であった。このことは、近代日本がいち早く欧米に倣って近代化を達成することができた理由であったが、それとともに、そうした鉱山開発は、一方では深刻な公害問題を発生させ、また一方では軍備を整え周辺地域の支配や周辺諸国との戦争を可能にした。鉱山遺構の産業遺産化を前提とした世界遺産登録運動に対して、近隣国や公害被害地域から反対の声が挙がったのは、遺産化が歴史を美化する傾向にあることに対し、警鐘を鳴らしたものにほかならない。つまり、鉱山遺構の遺産化と観光化は、歴史の解釈と近代の評価にもかかわるのである。これらのことは、今後の日本の世界遺産施策を考えていく上で、重要なものである。「明治日本の産業革命遺産」の提案によって、本格的に鉱山遺構の産業遺産化が推進され、また佐渡鉱山がすでに暫定一覧表に掲載されており、いずれ世界遺産に推薦することが目論まれているほか、足尾銅山などでも世界遺産登録推進運動が展開されている中、鉱山の遺構を産業遺産として価値づけ、観光資源として活用する際に、どのようなことが起こるのかについて、詳細な検討を必要としている。本研究では、こうした産業遺産の観光化と歴史記述の再構成に関わる諸問題を、諸外国の事例と比較研究することによって、明らかにする。

本研究の方法は、旧産業の遺構・遺物の産業遺産化や観光資源として活用する組みの視察、地域や旧産業に関わる歴史資料館や博物館の展示、および実際の遺構・遺物の観察を中心とし、並行して文献・資料収集、必要に応じて関係者へのインタビューを行う。インタビューは、産業遺産の保存と観光資源としての活用に関わる行政関係者や民間グループの代表者などを中心とする。本研究では、国内諸地域や海外における類似の事例を収集し、包括的に産業遺産を論じていく。

４．研究成果

研究初年度の 2015 年度は、本研究の基礎の形成にあてた。これまで収集してきた鉱山遺構・遺物の産業遺産化や鉱山の歴史や記憶をめぐる地域活動の取り組みについて、情報と資料を整理しとりまとめるとともに、ヨーロッパなどの海外の事例の視察を精力的に行った。ヨーロッパにおける事例としては、具体的には 9 月にスウェーデンのベリスラーゲン・エコミュージアムおよびダーラナ県の旧鉱山地域の視察を行った。同エコミュージアムは、ダーラナ県、ヴエストマンランド県にまたがる「世界最大」と言われるエコミュージアムであるが、19 世紀まで栄えた鉄鉱石の鉱山と製鉄所に関連した 60 を超えるサイトが点在している。ダーラナ県にはそれら以外にも銀銅山に関わる遺構や博物館が存在する。この視察では、ベリラーゲン・エコミュージアムの未訪のサイト約 10 ヶ所と、サラ銀山博物館や世界遺産「ファールンの大鉱山地域」に含まれる未訪のサイトなど、必ずしも有名とは言えないサイトを調査することを通して、遺産化の現状と来訪者の状況、地域での活動の内容を確認することができた。また、東南アジアにおける比較事例として、3 月にはマレーシアおよびタイにおける錫鉱山跡の現状と鉱山の記憶の観光資源としての活用例の視察を行った。この地域は、かつて 19 世紀に銅や錫鉱山として栄えたイギリスのコーンウォール地域の鉱山技術者が、世界中へと分れていった先の一つであるが、現場の鉱山運営は華僑の経営者と労働者によって担われた歴史を実地で確認した。具体的には、マレーシアのイポーやスンガイレンビン、タイのプーケットにおける事例について、鉱山の記憶と遺構の取り扱われ方について、現状と歴史の確認と資料収集を行った。国内においては従来からフィールドワークを行ってきた、栃木県の旧足尾銅山地域における鉱山町の記憶をテーマとした調査を行うとともに、調査に必要となった写真資料の収集を行った。

研究第２年度の 2016 年度は、さらなる比較事例研究のため、積極的に現地調査を行い、情報および資料の収集に努めた。具体的には、８月には北欧・スウェーデン、９月には北米・カナダ、３月には南米・チリおよびボリビアを訪問し、調査活動を行うことができた。スウェーデンでは、前年度にひきつづきベリスラーゲン・エコミュージアムおよびダーラナ県の旧鉱山地域について調査を行った。ダーラナ県は、ベリスラーゲン・エコミュージアムに含まれる西部地域だけでなく、東部地域も歴史的には銅山など非鉄金属を含む旧鉱山地域であり、スウェーデンで最初のエコミュージアムもここに存在している。双方の地域に足を運ぶことで、地域間の関係性と、鉱山や製鉄所の遺構が地域アイデンティティの一角になっている様子を観察した。カナダでは、ユーコン準州を中心に歴史的な鉱山地域と観光との関わりについて調査した。銅山地域であったホワイトホース周辺、かつてゴールドラッシュに沸いたドーソンシティ、銀山地域でありローカルな観光地となっているメーオーやキーノーシティなど、極地の都市の多くが鉱山都市としての系譜をもっており、現代の観光との関わりを観察することができた。ボリビアおよびチリでも、鉱山と観光との深い関わりが観察できた。ボリビアでは、ポトシをはじめとして、高地における鉱山資源の開発と観光は表裏一体のものとなっていることを確認した。チリは、現在も有力な銅

産出国であるが、採掘地区や技術的な遷移は、現役の鉱山の傍らで歴史的な遺構が観光対象になりつつあることを確認した。国内においては、エコミュージアム活動で知られる山形県朝日町の視察を行い、ひきつづき栃木県の旧足尾銅山地域を対象としたフィールドワークを行った。

研究第３年度の 2017 年度は、さらなる国際的な比較事例研究と、国内においてメインの研究フィールドとしている栃木県の旧足尾銅山地域に関する調査研究を精力的に行った。比較事例研究としては、７月には北欧・ノルウェーにおける鉱山遺構の現状と観光資源化などの地域での取り組みについて現地調査を行った。ノルウェーの南西部地域は、かつて銅山を中心とした鉱山が点在しており、それらの遺構が残るが、フィヨルド地形に阻まれるために交通の便があまりよくなく、国際的にはあまり知られていない。本研究では、そうしたノルウェー南西部にある、Litlabø 鉱山、Vigsnes 鉱山、Knaben 鉱山、Gursli 鉱山、Blåfjell 鉱山、Iveland 鉱山、Søftestad 鉱山、Blaafarveværket 鉱山、Åmdals Verk 鉱山、Allmannajuvet 鉱山、Volaheiane 鉱山の 11 か所の鉱山跡について現地を視察した。これらの鉱山跡の多くでは残っている地上施設が見学できるよう整備されていたり、ハイキングコースなどとして地域の住民に親しまれていたり、２か所では観光施設として、他の２か所では博物館として、地域の歴史を保存したりしていた。また、Knaben 鉱山では夏の僅かな時期に、遺構を見学するツアーが行われており、ツアーの様子を観察した。また、国内においては、栃木県の旧足尾銅山地域における調査研究活動として、栃木県立文書館の寄託資料である新井常雄氏撮影写真もとに、地域住民に地域の歴史や記憶に関する聞き取り調査を行った。これらの写真は、昭和 30～50 年代に撮影されたものであり、地域の貴重な文化遺産であることから、観光資源として活用する可能性について検討した。調査研究の成果の一部は、地元の施設での展示公開を行った。

研究最終年度の 2018 年度は、研究のとりまとめを中心に行った。これまでの研究において、比較事例研究として行ってきた北欧（スウェーデン、ノルウェーなど）の事例や、イギリス、ドイツ、ベルギーなどの西欧の事例、北米（カナダ）や南米（チリ、ボリビア）、東南アジア（マレーシア、タイ）などの事例について取りまとめるとともに、国内においても全国各地の事例について、収集した情報の取りまとめを行った。特にメインの研究フィールドとしてきた栃木県の旧足尾銅山地域に関する調査研究のとりまとめを精力的に行った。前者については、研究のとりまとめが中心となり、年度中に論文などよる研究成果の発表には至らなかったが、準備を進めているところであり、順次公表していく予定である。後者については、栃木県立文書館の寄託資料である新井常雄氏撮影写真もとに、地域住民に地域の歴史や記憶に関する聞き取り調査を行ってきた。昭和 30～50 年代に撮影されたこれらの写真は、地域の貴重な文化遺産であり、観光資源との活用も期待されていることから、これまでの研究活動の成果の一部として、比較対照写真の形で冊子にまとめ刊行した。本研究は科学研究費補助金助成研究としては、最終年度となったが、研究の最終的な取りまとめにはあと数年かかる見通しであり、完成の暁にはこれまでにない体系的なものとなることが期待できる。こうしたことから、今後も継続して本研究課題に取り組んでいく所存である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計　１件）

① 周藤　真也、ツーリストとは誰か？――「観光のまなざし」論の展開に向けて、早稲田社会科学総合研究、査読無、Vol.18、No.1、2018、pp.1-10
DOI: 2065/00057600

〔学会発表〕（計　０件）

〔図書〕（計　４件）

① 周藤　真也（編）、早稲田大学社会科学部周藤研究室、足尾・現在の記憶 2017、2018、214
② 周藤　真也（編）、早稲田大学社会科学部周藤研究室、昔の足尾／現在の足尾～新井常雄氏撮影写真とともに～ 比較写真帖 第１集、2019、20
③ 周藤　真也（編）、早稲田大学社会科学部周藤研究室、昔の足尾／現在の足尾～新井常雄氏撮影写真とともに～ 比較写真帖 第２集、2019、24
④ 周藤　真也（編）、早稲田大学社会科学部周藤研究室、〈特別展〉足尾・現在の記憶～新井常雄氏撮影写真とともに～、2019、40

〔産業財産権〕

○出願状況（計　０件）

○取得状況（計　０件）

〔その他〕

ホームページ等
http://www.f.waseda.jp/ssuto/

６．研究組織

(1)研究分担者
なし

(2)研究協力者
なし